博士学位請求論文審査報告

２００６年２月８日

申請者　　坂井洋史
論文題目　懺悔と越境　――中国現代文学史研究
審査委員　松永正義　木山英雄　坂内徳明

１　本論文の構成

坂井洋史氏の博士学位請求論文『懺悔と越境―中国現代文学史研究』(汲古書院、2005年9月刊行)は、中国近代においてモダニティーとはどのようなものであったのか、それが近現代文学の中にどのような問題として表現されているのか、という視点から、中国現代文学史の再構築のために、理論的前提を確認しようとするものである。

本論文は、A5版本文486頁、主要参考文献11頁、索引13頁からなり、以下の各章から構成されている。

序　章「巴金」のいない現代文学史
第一章　一九九〇年代中国の文化批評――「近代論」と文学史研究の構想
　Ⅰ「九〇年代」という時代
　Ⅱ「人文精神討論」
　Ⅲ文化批評における多様な議論の錯綜
　Ⅳ汪暉「当代中国的思想状況与現代性問題」による「九〇年代」の幕引き
　Ⅴ「近代論」を軸に据えた現代文学史の構想
第二章　懺悔と越境　あるいは喪失の機制――中国現代文学史粗描の試み
　Ⅰ　はじめに
　Ⅱ　天下・国家、あるいはモダンの陰影
　Ⅲ　喪失と越境の機制、あるいはテクストの共鳴
　Ⅳ　五四時期白話詩に見る喪失、あるいは賢者としての文学
　Ⅴ　懺悔と越境、あるいはモダンの逆説
　Ⅵ　むすび
第三章　想像の中国現代文学――竹内好における「文学」の行方
　Ⅰ　はじめに
　Ⅱ　禁域化された「文学」
　Ⅲ　個と全体を巡る思考――竹内好の「無理」
　Ⅳ　竹内好の葉聖陶『倪煥之』評価を巡って
　Ⅴ　むすび
第四章　都市文化としての大衆音楽――当代中国における大衆音楽解読とモダン理解の限界
　Ⅰ　音楽を記述することの困難
　Ⅱ　ロックは「大衆音楽」ではないのか
　Ⅲ　崔健はいかに「読まれる」か
　Ⅳ「ポップス」という権力――「人文性解読」の限界
第四章補論　中国ロックは如何に「読まれるか」

Ⅰ　ロック＝コーラ
Ⅱ　歌詞か、それとも楽曲か
Ⅲ　「人文的関心」以外にあるロック音楽
第五章　「原野」と「耕作」――初期白話詩習作に見る「人文的関心」と「模倣」の機制
Ⅰ　はじめに
Ⅱ　陳範予詩稿について
Ⅲ　作品（一）――韻文性への配慮
Ⅲ　作品（二）――短、長詩形の試みと王祺による詩稿添削
Ⅳ　「原野」と「耕作」――実人生に相渉る「詩」
第六章　中国現代文学者の言語意識とモダン認識の限界
Ⅰ　「文学＝人学」、あるいはテクストの「透明化」
Ⅱ　モダンの表象としての「近代文学」
Ⅲ　葉聖陶の「鋭敏」と「鈍感」
Ⅳ　おわりに
第七章　文学言語の「自然」と第三代詩の「口語化」をめぐって
Ⅰ　文学言語の「自然」と「不自然」――葛紅兵の「論難」から
Ⅱ　「第一代詩」＝政治抒情詩と「第二代詩」＝朦朧詩
Ⅲ　第三代詩における「抒情」とポストモダニズム、あるいは詩の合法化と解体
Ⅳ　第三代詩における「言語」への関心
Ⅴ　おわりに
終　章　文学言語のモダニティをめぐる対話へ
あとがき
主要参考文献
索引（人名、書名、事項）

2　本論文の概要

本論文の目的は、イデオロギーによる統合でもなく、個々の事象の集積でもない立場から中国現代文学史を記述するための、理論的前提を確認することにある。

序章は如上の目的を明らかにしようとする。坂井氏によればこれまでの中国現代文学研究は、たとえば唯物史観による裁断によって統合された叙述（外在研究）か、これへの批判から始まった個別作家の「実証」研究や個々の作品のテクスト分析など（内在研究）のいずれかであって、前者の問題は言うまでもないとして、後者の方法も事実の断片の集積を全体と見なすことから、かえって全体を見えなくしてしまうとする。あるべき文学史の叙述は、この両者の統合にあるが、そのためにはこれまでの文学史の記述を特徴づけてきた思惟のあり方を総括することが不可欠である。そしてそうした思惟のあり方を規定してきたものは、中国におけるモダン理解であったと坂井氏は指摘する。本論文全体が、近代中国におけるモダン理解の構造的分析に当てられる所以である。

坂井氏がここで言う文学史叙述とは、日本のそれではなく、唯物史観時代を通って８０年代から急速かつ豊富な展開を見せている、中国の文学史叙述である。本論文の目的はそうした中国近代の文学史叙述全体を批判し、対象化することであり、そこに本論文の大きな特徴と功績がある。

第一章は、序章で述べられた目的を達成するための理論的予備作業として、九〇年代の中国における議論を総括した部分であり、本論文中もっとも精細に富む部分のひとつであ

る。八〇年代の中国では、それ以前の文革に至る過程の問題を、中国社会の前近代性に求め、これを克服すべく「現代化」を唱えた。したがってここでの「現代化」とは欧米社会をモデルとする近代化に他ならなかった。それ故天安門事件と鄧小平による南巡講話以後、政府自身が欧米モデルの近代化路線を採用するにともない、批判的議論はその拠りどころを失うことになった。坂井氏はこうした状況の中で文化批判の主体の再構築をめざして行われた「人文精神討論」を、大きな問題提起として受け止め、またそこで出された様々な問題を総括したものとして王暉「当代中国的思想状況与現代性問題」を評価する。その中で明らかにされた視点は、中国では近代の持つ二面性の中で、解放の契機については五四精神といった形で常に準拠軸となっていながら、他方近代自身の持つ抑圧の契機については自覚されることが少なかったということである。こうした視点から中国現代文学を読み直していくことが、本論文の方法となる。

第二章は、二、三〇年代の作家郁達夫らと、八〇年代の作家張賢亮らの作品を取り上げ、そこに共通する構造として、中国知識人が自らを規定している共同性（国家、社会、民族、階級など）を対象化することなく、無自覚の完全な自己否定（「懺悔」）を代償に、共同性の外部に想像した「真理」へ、主観的にアイデンティファイしていく（「越境」）という思惟上の特質を指摘する。自らの属する共同性への性急かつ全面的な否定が、無自覚的、全的自己否定を生み、それがまた来たるべき新たな共同性を、自らの外部へ押しやることになる。こうした機制が、例えば近代を外部の「真理」として受け取らせることとなり、そこに前章で述べられた近代理解の一面性が生ずることになる。

第三章では、以上のような近代の一面的理解と対比する形で、「過剰な近代論」の中にある日本の状況を代表するものとして、竹内好が取り上げられる。ここでは竹内の葉聖陶、趙樹理に関する論考を手がかりに、竹内が自らの近代論の完整を求めるあまり、自らの文学的感性を排除していることが指摘される。また併せて、中国現代文学のなかで、近代の一面的理解にとどまらない可能性を示した例として、葉聖陶、茅盾の例が挙げられる。

第四章では、ロック音楽が九〇年代の中国文化界の中でどう「読まれ」てきたかを分析する。中国では、ロックが全体としては市場原理の規制の下にあること、また本来演奏活動の現場で捉えられるべきものであることが捨象され、もっぱら「作家」の時代性、思想性が、多くは歌詞に基づいて論ぜられるにとどまることが、崔健を例にして論ぜられる。崔健の歌詞に「文化反抗」の詩を読み取るこうした解読を、坂井氏は「人文性解読」と名付け、それが近代理解の平板化を結果しているのではないかと指摘する。

第五章では、陳範予という五四時期の無名の青年の白話詩を手がかりに、作詩のモチーフの中に、実人生や社会的現実を重視する「人文的関心」が大きな部分を占めていること、また実際の作詩に当たっては先行テクストの模倣に拠っており、それが「人文的関心」そのものの抽象化につながることが指摘される。なお、ここで取り上げられる陳範予の詩は、坂井氏自らが発掘、整理したもので、はじめて公表されるものである。

第六章では、「人文性解読」が、文学における「人間的興味」の強調（「内容」の重視）を導き、テクストの「透明化」を要求すること、その結果として、テクストおよびその主要な要素である「言語」に対する意識の希薄という偏向（「形式」の軽視）を醸成することが指摘され、また、このような言語意識の希薄が、言語のイデオロギー性に対する「鈍感」に繋がることが、葉聖陶の標準語＝「普通話」擁護、言語の規範化の要請に従った旧作の改訂を通じて検証される。ここでの葉聖陶の「鈍感」の指摘は、第三章での、葉聖陶が近代の持つ抑圧的契機に「敏感」であったことの指摘と呼応するもので、第五章に述べられた「人文的関心」の大きさが、いわば言葉を道具として「透明化」し、言葉そのものに批判的に向き合う契機を失わせるという機制の中では、葉聖陶も例外ではなかったことになる。

第七章では、八〇年代後半に現れたいわゆる「第三代詩」の詩人たちが、国家、社会といった「大きな物語」を、個人を拠りどころとして相対化しようとする志向を持つもので、それ故「個人的な自然な口語」という形で、言葉そのものを対象化するに到ったと論じられる。こうした言葉への関心は、言語のイデオロギー性への批判を内在する故に、近代の抑圧的契機を対象化する可能性を含む。ここに坂井氏は新しい中国文学の可能性を見ている。もっとも坂井氏は第三代詩を手放しで評価しているわけではなく、如上のような可能性とともに、自然な口語という観念が、第六章に述べられたような言葉の「透明化」につながる側面をも指摘している。

終章では、以上のような論究の総括として、張煒という実作者の言語への関心を手がかりとして、張新穎、王暉らの言語論が総括されている。

3　本論文の成果と問題点

本論文の成果と特色は、第一に、中国近代知識人の近代理解の一面性を実証的に指摘し、中国現代文学を現在の時点で読み直すための理論的糸口をつけたことである。坂井氏が「九〇年代アイロニー」と呼ぶ事態、すなわち八〇年代の批判的議論の拠りどころであった「現代化」が、九〇年代には権力の主流イデオロギーになることで、批判的議論がその拠りどころを失うという事態の中で、中国でも社会主義であると否とを問わず、中国の近代を全体として問題にしようとする機運はある。坂井氏の高く評価する「人文精神討論」の論者たちや王暉などである。本論文はこうした機運と呼応しつつ、問題を的確に整理したものである。それは日本よりもむしろ中国に於いて、今後の議論のための無視し得ぬ土台を築いたものと考えられ、またひるがえってそれは、日本に於いては現在の中国での議論を理解するための的確な見取り図を提供したかたちになっている。

第二に、如上の作業を、単なる理論としてでなく、むしろ第四章以下のように、実作の解読の中で実証しようとしている点が、本論文の優れた点であり、また特色ともなっている。人文精神討論、葉聖陶の普通話論、第三代詩などの個々の事象、作品の解読の中に、教えられる部分は多い。また茅盾、葉聖陶といったよく知られた作家から、陳範予という無名の詩人まで、また現代の第三代詩人からロック歌手崔健までの、坂井氏の目配りの広さは特筆すべきものであり、それが個々の事象、作品の解読の的確さを支え、かつ第一に述べた理論的作業を豊かなものとしている。

第三に、坂井氏はその議論の多くを、「懺悔」と「越境」、「人文性解読」、言語の「透明化」といった自前の概念を設定することによって行っており、そのことが本論文をややわかりにくくしているが、しかし安易に既成の枠組みに寄りかからないこうした姿勢が、問題の複雑さを損なうことなく取り出すことを可能にしているように見える。それはまた日本と中国というまったく異なった文化風土のはざまにあって、これを架橋しようとする坂井氏の努力の現れでもあるように考えられる。

最後に、坂井氏がこうした論究を中国の作家、研究者との「対話」の中で行おうとし、かつそれに成功していることは、やはり特筆しておくべきだろう。事実本論文の大部分は、中国に於いても公表され、真剣に受け止められてきている。日本における問題関心を保持しつつ、中国における議論に内在しようとする坂井氏の姿勢は、多くのねじれをふくむ日中関係と、大きく異なる文化風土故に、予想以上の困難をふくむものだが、それだけに坂井氏のそうした姿勢は今後の中国文学研究のよき範例となっているように思われる。

ただし望蜀の言をいえば、坂井氏は近代の一面的理解の例として、実人生、実社会への関心（「人文的関心」）が、言葉を道具として見る言語の「透明化」をもたらし、それが

言語のイデオロギー性への無自覚を結果として生みだしたとする。こうした指摘は近代という場（時期）のなかではひとつの有効な指摘と言える。しかしながら中国文学の伝統の中には、早く「言は意を尽くさず」といったかたちでの言葉への懐疑があるし、周作人が「言志」と「載道」の交替として中国文学史を構想したということもある。こうしたところから考えれば中国の近代全体が、いわば「載道」の側に偏していたものと見ることもできよう。一体に中国における文の伝統は、文人の特権的立場と分かちがたいものとしてあり、それ故にそれは現実とは異なるレベルでの自律的展開の中にあったという側面がある。中国の近代文学はそうした文の伝統の否定から始まったものであり、それ故人生主義、内容主義が強調されたのだと見ることもできる。また「文飾」に対して「自然」が対置されることも、中国文学の伝統の中になかったことではない。こうした中国の文学伝統の中に、坂井氏のいう中国近代文学の特質を置いて見たときに、どのようなことが考えられるかは、ひとつの興味ある問題だろう。それは坂井氏の議論を単なる近代批判に終わらせないためにも、必要な視点ではないだろうか。これは坂井氏の今後の研究の中に期待すべきことであり、本論文への批判ではない。

以上のことから審査委員一同は、本論文が独創性に富むすぐれた論文であると認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考える。

最終試験結果要旨

２００６年2月８日

受験者　　坂井洋史
最終試験委員　松永正義　木山英雄　坂内徳明

２００６年１月２４日、学位請求論文提出者坂井洋史氏の論文及び関連分野について、本学学位規定第８条第１項に定めるところの最終試験を実施した。

試験においては、提出論文『懺悔と越境―中国現代文学史研究』に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、坂井洋史氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査委員一同は、坂井洋史氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。

以上